



今夏、南米ペルーでの調査中、ある展覧会をめぐる騒動に出会った。

画家ピエロ・キハーンの「政治風刺画一九九七〜二〇〇七」展に対して軍が抗議を行い、これに敏感に反応した文化庁が、ポスターと一部の作品の撤去を主催者に強要したと語られる事件である。

ポスターには、倒れた先住民の頭に巨大な銃を突きつけている軍人の構図が見られる。銃などの素材の違いはあるが、一九四五年にピューリッツァー賞を受賞した有名な写真「硫黄島の星条旗」を意識していることは間違いない。国防を担う軍人にしてみれば、刃を国民に向けた構図は許せないのかもしれない。

しかし、テロの時代、一掃作戦の名の下に、軍が先住民の人権を蹂躪した点は、以前からマスコミでも指摘され、的はずれな題材とはいえない。文化庁は、検閲や介入を否定しているが、この件で更迭された博物館長は、介入の事実をマスコミに暴露している。

撤去対象の作品の中には、世界

## 刺風政治も力強く ぺルー

遺産マチュ・ピチュをテーマにしたものもあった。遺跡の警備員が先住民の入場を断り、その脇を携帯電話とブリーフケースを抱えた背広姿のビジネスマン二人が通り過ぎ、遺跡を目指す図柄だ。

現在ペルーで審理中のフジモリ元大統領の政権下、新自由主義政策が進められ、遺跡管理の民営化さえ語られたことがあった。マチュ・ピチュでも、環境や文化への影響評価もせずにロープウェイを建設する計画が持ち上がり、入札まで進められた。ユネスコや世論の批判を受け、計画は頓挫したが、今回の作品が、その事件を題材にしたことは間違いない。

それにしても、マチュ・ピチュの山上にアメリカの映画産業を思い起こさせる「マチュ・ピクチャー」というネオン看板が立ち、経済的效果への偏重を揶揄する構図は秀逸である。ペルーの政治風刺は、日本以上にきわどいものが多いが、そのこと自体が、政治を日常生活に近づけてきたのも事実である。風刺の力が削がれぬことを望みたい。(国立民族学博物館教授・関雄二)